

原本蒙古字韻の復元 一校正字様の浙東本誤をめぐって一

吉池孝一

1. はじめに

ここでは『倫敦抄本』(ロンドンの大英図書館所蔵。清代乾隆年間書写¹)巻頭の“校正字様”中の記述を検討することによって、下二十二葉以降は蒙古字韻の地方的異本の「浙東本」であること²、「原本蒙古字韻」の所収字が第一層(現存する『新刊韻略』)と第二層(現存する『新刊韻略』以外のほぼ86字)の二種から成っていたことなどを述べる³。これをふまえ、蒙古字韻の沿革につき現時点の考えを示すと表1となる。なお「原本蒙古字韻」が如何に成立したかという点については稿を改めて述べる。

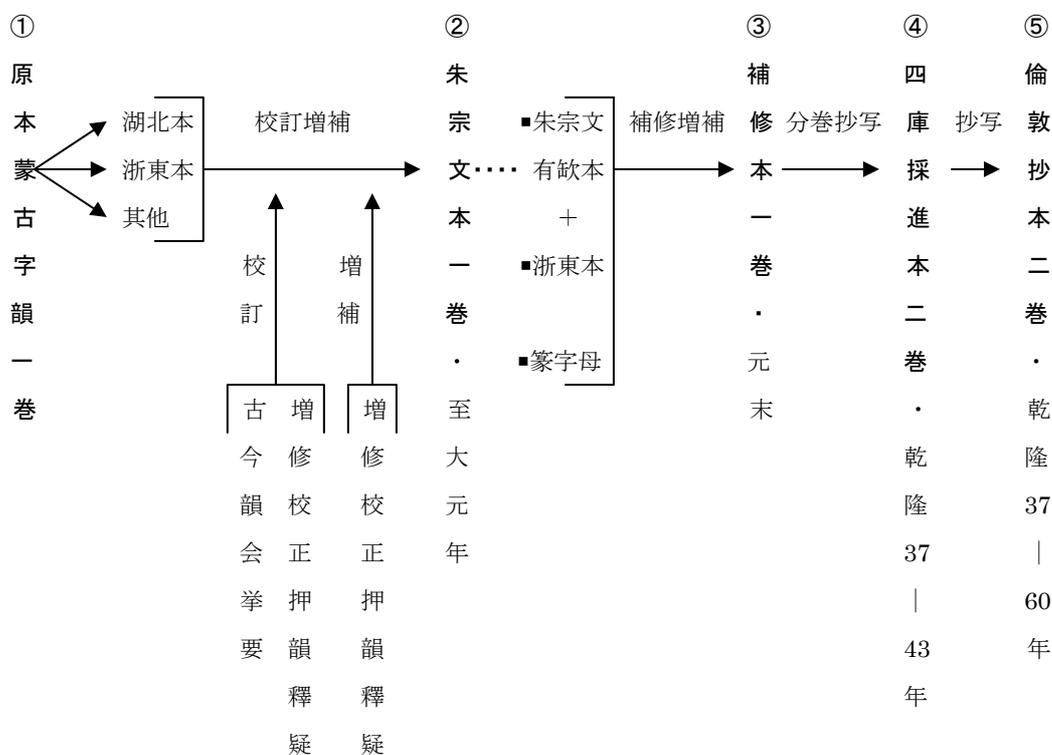


表1

¹ 尾崎 1962 は欠筆に着目した研究により清の乾隆年間(1736-1795年)に書写されたとする。吉池 2009a は、期間を最も狭くとるならば、乾隆37年前後から乾隆42年までの間とした。後者は状況証拠によるものであり確実とは言い難いが参考にはなる。

² 下二十二葉以降が「浙東本」であることは吉池 2008c で述べた。ここでは同じ問題をやや詳しく新たな観点を交えて述べる。しかしながら、2008c と補い合う部分があり関心のある向きには両者を合わせ見られたい。

³ 『倫敦抄本』所収字の主層が『新刊韻略』によることは寧忌浮 1992 で明らかにされた。『新刊韻略』以外の86字については寧忌浮 1997:163にある。寧氏はこの86字は蒙古字韻の編纂者が増加したものであるとするが論拠は示さない。

さて、蒙古字韻には幾つか異なるテキストがあったらしく朱宗文はそれらを付き合わせて誤りと見なしたものを正し、さらに所収字を増補し一本を成した。この一本を「朱宗文本」(朱氏序 1308 年)と称する。現存する唯一の蒙古字韻のテキストである『倫敦抄本』はこの「朱宗文本」の流れを汲むものである⁴。朱宗文は自らの作業を 4 種の項目に分類し、「朱宗文本」の巻首に“校正字様”と題して収めた。すなわち、各本を通じた誤りの訂正(各本通誤字)、各本に重複し誤って収められた字の削除(各本重入漢字)、「湖北本」と称される一本の誤りの訂正(湖北本誤)、「浙東本」と称される一本の誤りの訂正(浙東本誤)である。これらのうち、各本通誤字と各本重入漢字と湖北本誤についてはすでに検討した⁵。今回は“浙東本誤”を検討する。浙東本誤は「浙東本」の特異な誤りを訂正したものにはすぎないが、訂正の記述の中に「原本蒙古字韻」がどのような体裁であったかを知る重要な手がかりがある。検討に先立って下に『倫敦抄本』巻首の浙東本誤を翻字し訳を付した。なお、パスパ文字は脚注の方式によってローマ字に翻字する⁶。

浙東本誤

ylém	ɲém	炎从疑
k'iy	k'hiy	刻字
šlě	čě	蛇从澄

- ・炎を ylém とするのは浙東本の誤りであり、正しくは疑母に従う ɲém。
- ・刻を k'iy とするのは浙東本の誤りであり、正しくは k'hiy。
- ・蛇を šlě とするのは浙東本の誤りであり、正しくは澄母に従う čě。

これより順次検討するが、一つ目の校訂が特に重要であり紙数を多めにさいた。他の二つは簡単に触れる程度とする。

2. 一つ目の校訂

“炎を ylém とするのは浙東本の誤りであり正しくは疑母に従う ɲém である”ということについて。

この記述によると、蒙古字韻の幾つかのテキストのうち、炎の声母を誤って y1- とするのは「浙東本」であり、他の各本では正しく ɲ- としていた、ということになる。この校訂は一見奇異に映る。炎の声母は中古の音類でいうと喻母 3 等開口字であり、喻母相当の y1-

⁴ 「朱宗文本」の後、元末に「朱宗文本」の欠落を「浙東本」で補った「補修本」が刊行された。その「補修本」の末裔が、現存する『倫敦抄本』である。このことについては吉池 2008c で述べた。

⁵ 各本通誤字は吉池 2008b で、各本重入漢字は吉池 2009d, 2010a で、湖北本誤は吉池 2010b で検討した。

⁶ このローマ字翻字は吉池 2005 を修正したものである。ローマ字右の漢字は伝統的な 36 字母。〈子音〉 𐮀 見 𐮁 k' 溪 𐮂 𐮃 k 群 𐮄 ɲ 疑 𐮅 d 端 𐮆 t' 透 𐮇 t 定 𐮈 n 泥 𐮉 l 来 𐮊 b 幫 𐮋 p' 滂 𐮌 p 並 𐮍 m 明 𐮎 f (𐮏 f1 奉 𐮐 f2 非敷。f1, f2 の区別がない場合は f とする。1 は旧濁音、2 は清音。以下数字を用いるものは同様)、𐮑 v 微 𐮒 j 照知 𐮓 ɕ 穿徹 𐮔 ɕ 床澄 𐮕 ɲ 娘 𐮖 š (𐮗 š1 禪 𐮘 š2 審) 𐮙 ž 日 𐮚 j 精 𐮛 c' 清 𐮜 c 從 𐮝 s 心 𐮞 z 邪 𐮟 ɣ 影 𐮠 h (𐮡 h1 匣 𐮢 h2 曉) 𐮣 γ 匣(合)、𐮤 y (𐮥 y1 喻 𐮦 y2 幺(影)) 𐮧 ' 魚(喻) 𐮨 r 𐮩 q 〈半母音〉 𐮪 ü 𐮫 i 〈母音〉 𐮬 u 𐮭 i 𐮮 é 𐮯 e 𐮰 o とし、母音 a は()を付して補写する。

この誤は「浙東本」に特有の誤であり他の各本には無かったはずであるから、少なくともこの誤を含む部分は「浙東本」であると考えざるをえない。そうであるならば、「朱宗文本」の流れを汲む『倫敦抄本』が、一部分にせよ「浙東本」を含むのは何故かという疑問に答えなければならない。

照那斯圖・楊耐思 1987 はこれを“朱宗文の校訂の誤り”（朱氏校誤）とする¹⁰。“炎は疑母である”とした朱氏の判断自体が誤りであるということであるのか、それとも朱宗文の校訂の漏れということであるのか“朱氏校誤”の意味するところは明瞭ではないけれども、かりに校訂漏れであるという意味ならばそれは「浙東本」を藍本としてそれに校訂・増補を加えて「朱宗文本」としたと想定して初めて成り立つことである。「浙東本」を藍本として「朱宗文本」を作ったと想定することに無理はないが、“校正字様”で正すと言っておきながら、本文に手をつけなかったなどということは杜撰の極みであり、そのようなことが起こるとは思えない。しかしながら実際には“杜撰の極み”に見える事態が起こっているわけでありこれをどのように考えるかということであるが、本文中の増字・増注の有無と関連させることにより解決することができる。『倫敦抄本』の本文をみると、本文初頭の上八葉から下二十一葉の間に増字・増注はあるのだが、「浙東本」の誤を含む下二十二葉から巻末の下三十葉に至る間に増字・増注は一つもない。すなわち、下二十二葉以降とその前の部分とでは増字・増注の有無によって分かれるわけであり、なぜこのような不自然な体裁となっているのかという疑問にも答えなければならない。

『倫敦抄本』は何故「浙東本」の誤を含むのか、「浙東本」の誤を含む下二十二葉以降には何故増字・増注が無いのか。このうち校訂の問題については、吉池 1993b において“14の校訂箇所のうち、12箇所が本文と参照可能であり、その12のうち、8が「校正字様」どおりに本文も直されているが、2は直されておらず、さらに2は校訂されるべき漢字そのものがない。これでは、本文を直ちに朱宗文の校訂本であるとして良いかどうか疑義が残る。欠落のある版本や写本などを合して一本としたのが現存する乾隆写本ではなかろうか”（乾隆写本とは『倫敦抄本』のこと）としたが解決には到らなかった。それは未校訂の問題と増字・増注の問題を別々に考えており両者を結び付けなかったためであり、さらには「朱宗文本」の後に「補修本」が刊行されたということに考えが及ばなかったためである。その後、吉池 2008c に到ってようやく解決をみた。詳しくは当該論文を参照していただきたいが、「浙東本」の誤を含み尚且つ増字・増注の無い下二十二葉以降は「浙東本」そのものであり「朱宗文本」ではないとするものである。すなわち、欠落が生じた「朱宗文本」を「浙東本」で補修して刊行した一本すなわち「補修本」があり、その「補修本」を抄写したものが現存する『倫敦抄本』なのである。このように想定するならば、『倫敦抄本』は何故「浙東本」の誤を含むのか、「浙東本」の誤を含む下二十二葉以降には何故増字・増注が無

10 照那斯圖・楊耐思 1987 は““炎”《廣韻》于廉切，喻母，《韻會》同。本韻書下廿三 a 也作 jem，從喻不從疑，朱氏校誤。”（160-161 頁）とする。ここで《韻會》即ち『古今韻會舉要』も喻母とすると述べるのは誤解であり『古今韻會舉要』は疑母とする。

いのかという二つの疑問を無理なく解決することができる。

さて、下二十二葉以降が「浙東本」であるとする、この「浙東本」より「原本蒙古字韻」の体裁を窺い知ることができる。何故ならば「浙東本」は「原本蒙古字韻」の地方的な異本であり「原本蒙古字韻」に極めて近い体裁となっていたと考えられるからである。そこで「浙東本」と想定される部分の所収字をみると、『新刊韻略』から採られた部分(第一層)および『新刊韻略』に未収録で義注も付されていない部分(第二層)から成っていることがわかる。「浙東本」は第一層と第二層から成っているのであるが、実はこの二層から成っているのは「浙東本」だけではない。これは吉池 2010b で述べたことであるが、朱宗文は「湖北本」の誤の訂正の中で“驃”と“輜”の訂正に言及した。校訂で言及されるということは、この二字は朱宗文が新たに増補したものでもなければ朱宗文以降に増補されたものでもない。朱宗文以前に蒙古字韻に取り込まれていなければ、校訂において言及することはできない道理である。そしてこの二字は『新刊韻略』に収められておらず義注も付されていない第二層に属す字である。「湖北本」の所収字も第一層と第二層から成っていたのである。「浙東本」と「湖北本」の両者が第一層と第二層から成っていたとすると、これは両者が基づいた「原本蒙古字韻」の特徴であったとすることができる¹¹。もともと第二層(ほぼ 86 字)につき、寧忌浮 1997:164 は“以上 86 字、可能是《蒙古字韻》的編纂者增加的。”と述べる。第二層(86 字)は「原本蒙古字韻」の段階で既に取り込まれていたであろう。もともとその論拠は示さない。いま「浙東本」と「湖北本」の両者に二つの層が含まれることを論拠として寧忌浮 1997 の予想が成立することを確認することができる。

なお、照那斯圖・楊耐思 1987、花登正宏 1997、Coblin2007 はいずれも“炎”字のパスパ文字表記を喻母相当のものとする。これは『倫敦抄本』本文における事実であるが、蒙古字韻では喻母 3 等開口字を η - (疑母) で表記し喻母 4 等開口字を $y1$ - (喻母) で表記するのが原則となっており、尚且つ下二十二葉以降が「朱宗文本」ではなく「浙東本」であり“ $y1\text{em}$ [平] 炎”が「浙東本」の特殊な部分であるからには、蒙古字韻につきその音体系を論ずる際には、炎を疑母相当の字として扱うべきであろう。

最後に、『倫敦抄本』“ $y1\text{em}$ [平] 炎 焱 鹽 塩 閻 檐 簷”の“焱”について触れておきたい。“焱”字は諸韻書において喻母 3 等にも喻母 4 等にも登録されていない。なぜこの字がこの位置に配されているのか説明するのは困難である。そこで『附釋文互注礼部韻略』『増修互注礼部韻略』『増修校正押韻釋疑』『五音集韻』をみると、そのいずれにおいても炎と

¹¹ 吉池 2010b では以下の三つの可能性があるとした。一つ目は、「原本蒙古字韻」は第一層と第二層から成っていた。二つ目は、第一層のみから成る「原本蒙古字韻」があってその後第二層が増補され更にその後各異本に分かれた。三つ目は、第一層のみからなる「原本蒙古字韻」があって地方的な異本の段階で第二層が増補された。しかしながら、異本の「浙東本」と「湖北本」の両者が共通して第二層を含むことをみるならば、このような特徴は異本の段階で生じたのではなく、「原本蒙古字韻」にあった特徴であり、それが地方的な異本に受け継がれたと考えた方がよく、三つ目の想定は不適當ということになる。問題は二つ目のように第一層のみから成る「原本蒙古字韻」を想定する必要があるか否かということである。いまのところそのような想定を積極的に支持する材料が無い。一つ目のように「原本蒙古字韻」は最初から第一層と第二層から成っていたとしたほうが複雑にならずにすむため、こちらの考えによることにする。

愆は同音字として出てくる。おそらく『倫敦抄本』の焱は愆の誤写に基づく字であろう。そうすると、「浙東本」以外の各本は“*ɲəm* [平] 嚴炎愆”であったと考えられ、この状況を「原本蒙古字韻」に遡らせることも可能である。

3. 二つ目の校訂

“刻を *k'iy* とするのは浙東本の誤りであり正しくは *k'hiy* である”ということについて。

ここでは韻母が *-iy* であったかそれとも *-hiy* であったかということが問題となっている。いま『倫敦抄本』の中から *k'iy* が出現する可能性のある個所を挙げると、下に示すように、下一 *a* から下一 *b* の間かその前後である。しかしながら、*-hiy* を韻母とするものばかりであり、*-iy* を韻母とする音節はない。なお *i* の前に摩擦子音字 *h* を付す *hi* は中舌母音を表記したものとされている。ところで、最後の二つ *hiy* と *ɣiy* は、一見 *-iy* を韻母とすように見えるが、摩擦音声母の *h-* と *ɣ-* は韻母の特徴をも同時に表しており、実質的には *hhiy* と *ɣhiy* に相当するものである。パスパ文字の正書法として *h* は表記せず声母で代用しているのである。したがって、ここには *k'iy* という音節がないだけでなく、*-iy* という韻母自体がないということになるが、おそらく「浙東本」では下一 *a* ~ 下一 *b* 間かその前後に“*k'iy*[入]刻”があったのであろう。

k'hiy [入] 刻克剋 (下一 *a*)

dhiy [入] 徳得

t'hiy [入] 忒慝貳

thiy [入] 特騰

jhiy [入] 旻仄側

č'hiy [入] 測惻髮

čhiy [入] 崩

jhiy [入] 則

chiy [入] 賊蟹

shiy [入] 塞

slhiy [入] 色齋穢 (下一 *b*)

lhiy [入] 勒肋肋仿泐

hiy [入] 黒

ɣiy [入] 刻(照那斯圖・楊耐思 1987:168 は“劾”の誤とする)

次に *k'hiy* 刻が現れる個所をみる。『新刊韻略』によって所属韻と反切と字の順番を記すと次のとおりである。

1 2 ③

k'hiy [入] 刻 克 剋

(下一 *a* の 1 行目)

13 職[徳]苦得切

“刻”は『古今韻會舉要』に“克訖得切 剋 刻”とあり、刻と克と剋は同音であることがわかる。これにより「浙東本」で“k'iy[入]刻”とあったところ、刻を克や剋と同音とみて k'hiy の下に収めるべく訂正したのであろう。もっとも「浙東本」以外の各本に問題はなかった個所であり、ここも『古今韻會舉要』から期待されるものとなっている。

4. 三つ目の校訂

“蛇を s1è とするのは浙東本の誤りであり正しくは澄母に従う cè である”ということについて。

蛇は『倫敦抄本』末尾数葉の欠落部分に掲載されている字であり、残念ながら直接確認することはできない。この字につき『新刊韻略』をみると二箇所音の表示がある。一つは六麻の小韻代表字として“蛇食遮切”がある。いま一つは五歌の小韻代表字“佗”の所属字として“蛇”がありそこに又音として“市遮切”がある。前者の食遮切によるならば澄母(c)であり、後者の市遮切によるならば禪母(s1)である。なお、『古今韻會舉要』の本文は禪母(s1)とし、『古今韻會舉要』の巻頭に付されている“禮部韻略七音三十六母通攷”は澄母(c)とする。このように状況は複雑であるが、いま検討している“校正字様”の記述によると、蒙古字韻の各本は澄母(c)であったが、「浙東本」は禪母(s1)であったことは確からしい。そうであるならば「原本蒙古字韻」では澄母(c)であったと想定し得るが、先に述べたように『倫敦抄本』欠落部分の字であり直接確認することはできない。照那斯圖・楊耐思 1987:141 は『古今韻會舉要』に従い禪母(s1)として復元しているが、“校正字様”の記述によるかぎり澄母(c)として復元すべきであろう。寧忌浮 1997:187 は澄母(c)として復元している。

5. おわりに

以上、「浙東本」の校訂を検討した。このうち一つ目の校訂が特に重要であり「原本蒙古字韻」の復元に関わる少なからぬ情報を提供する。その情報によると、『倫敦抄本』は「浙東本」特有の誤を含んでおり、尚且つその「浙東本」の誤を含む下二十二葉以降は増字・増注が無いという特異な体裁となっている。これより下二十二葉以降は、校訂・増補済みの「朱宗文本」ではなく、校訂前の「浙東本」そのものであるとすることができる。それでは『倫敦抄本』に何故「朱宗文本」と「浙東本」が混在するかといえば、「朱宗文本」の欠落を「浙東本」で補って刊行した「補修本」なるものが存在しており、この「補修本」を清代の乾隆年間に抄写したものが現存する『倫敦抄本』であるからである。すなわち、『倫敦抄本』の藍本は「補修本」であって、朱宗文によって校訂・増補が施された「朱宗文本」ではないのである。

このように『倫敦抄本』の下二十二葉以降が「浙東本」であるとする、「原本蒙古字韻」の研究に便宜を与えることとなる。なぜなら、蒙古字韻の「浙東本」や「湖北本」は「原本蒙古字韻」の地方的な異本であり、「原本蒙古字韻」の体裁に近いものと想定することが

できるからである。そのような「浙東本」と「湖北本」の両者の所収字が第一層(現存する『新刊韻略』)と第二層(現存する『新刊韻略』以外のほぼ 86 字)から成っていたことがわかるわけであるが、そうであるからには「原本蒙古字韻」の所収字も第一層と第二層から成っていたとすることができるのである。

<参考文献(発行年順)>

- 関西大学東西学術研究所 1956. 『影印大英博物館蔵舊鈔本蒙古字韻』 大阪：関西大学。
- 羅常培・蔡美彪 1959. 『八思巴字與元代漢語〔資料彙編〕』 北京：科学出版社。
- 尾崎雄二郎 1962. 「大英博物館本蒙古字韻札記」, 『人文』 第 8 集, 162-180 頁。
- 鄭再發 1965. 『蒙古字韻跟八思巴字有關的韻書』 台北：国立台湾大学文学院。
- 橋本萬太郎 1971. 「ブリテン博物館蔵旧抄本蒙古字韻雜記」, 『AA 研通信』 14, 1-4 頁。
- 兪昌均 1973. 『較定蒙古韻略』 台北：成文出版社。
- 照那斯圖 1980. 「八思巴字篆体字母研究」, 『中国語文』 1980 年第 4 期, 307-309, 269 頁。
- 照那斯圖・楊耐思 1987. 『蒙古字韻校本』 北京：民族出版社。
- 黄愛平 1989. 『四庫全書纂修研究』 北京：中国人民大学出版社。
- 遠藤光暁 1990. 「在欧のいくつかの中国語音韻史資料について」, 『中国語学研究 開篇』 第 7 号, 25-44 頁。
- 花登正宏 1990. 「《蒙古字韻校本・校勘記》校補」, 『東北大学文学部研究年報』 第三十九号, (216)-(208) 頁。
- 寧忌浮 1992. 「《蒙古字韻》校勘補遺」, 『内蒙古大学学报(哲学社会科学版)』 1992 年第 3 期, 9-16 頁。
- 吉池孝一 1993a. 「『蒙古字韻』の増補部分について」, 『語学研究』(拓殖大学語学研究所) 第 72 号, 17-31 頁。
- 吉池孝一 1993b. 「『蒙古字韻』の元刊本と乾隆写本」, 『中国語学』(日本中国語学会) 第 240 号, 31-40 頁。
- 遠藤光暁 1994. 「『四声通解』の所拠資料と編纂過程」, 『論集』(青山学院大学) 第 35 号, 117-126 頁。
- 中村雅之 1994. 「『蒙古字韻』と『古今韻会举要』」, 『富山大学人文学部紀要』 第 20 号, 147-162 頁。
- 中村雅之主編 1994. 『パスパ字漢語資料集覧』 富山大学人文学部中国語学研究室内パ^スパ^字研究会。
- 吉池孝一 1995. 「『蒙古字韻』のロンドン写本とその複製本」, 『語学研究』(拓殖大学語学研究所) 第 78 号, 197-208 頁。
- 花登正宏 1997. 『古今韻會舉要研究』 東京：汲古書院。
- 吉池孝一 1997. 「中世蒙古語の漢字音訳と「蒙古字韻総括変化之図」」, 『日本モンゴル学会紀要』 第 27 号 (1996), 77-90 頁。
- 寧忌浮 1997. 『古今韻会举要及相關韻書』 北京：中華書局。
- 中村雅之 2003. 「四声通解に引く蒙古韻略について」, 『KOTONOHA』 第 9 号, 1-4 頁。
- 吉池孝一 2005. 「パスパ文字の字母表」, 『KOTONOHA』 第 37 号。
- Coblin, W. South. 2007. *A Handdook of 'Phags-pa Chinese*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- 吉田順一・チメドルジ 2008. 『ハラホト出土モンゴル文書の研究』 東京：雄山閣。

- 吉池孝一 2008a. 「蒙古字韻の改装などについて」, 『KOTONOHA』第 65 号, 11-12 頁。
- 吉池孝一 2008b. 「蒙古字韻の校訂と増補について」, 『KOTONOHA』第 70 号, 7-16 頁。
- 吉池孝一 2008c. 「蒙古字韻の補修について」, 『KOTONOHA』第 71 号, 1-9 頁。
- 吉池孝一 2008d. 「原本蒙古字韻再構の試み」, 『International Workshop on Hunminjeongeum and hPags-pa script』韓国学中央研究院 (2008 年 11 月), 141-155 頁。
- 中村雅之 2008. 「パスパ文字の字母表について」, 『KOTONOHA』第 73 号, 1-3 頁。
- 韓国学中央研究院研究處編集 2008. 『蒙古字韻』(影印本。解題: 鄭光) 韓国城南市: 韓国学中央研究院。
- 吉池孝一 2009a. 「蒙古字韻四庫採進本及び現存写本の書写時期」, 『KOTONOHA』第 74 号, 41-43 頁。
- 吉池孝一 2009b. 「原本蒙古字韻考」, 『KOTONOHA』第 81 号, 10-17 頁。
- 吉池孝一 2009c. 「蒙古字韻の篆字母表について」, 『KOTONOHA』第 82 号, 13-18 頁
- 吉池孝一 2009d. 「原本蒙古字韻の復元 一校正字様の各本重入漢字をめぐって(1)一」, 『KOTONOHA』第 85 号, 13-20 頁。
- 吉池孝一 2010a. 「原本蒙古字韻の復元 一校正字様の各本重入漢字をめぐって(2)一」, 『KOTONOHA』第 86 号, 16-24 頁。
- 吉池孝一 2010b. 「原本蒙古字韻の復元 一校正字様の湖北本誤をめぐって一」, 『KOTONOHA』第 87 号, 12-18 頁。